



# 新九郎通信



発行 小田原市栄町2-13-3 (株)伊勢治書店3F ギャラリー新九郎 木下泰徳  
 メール配信サービスご希望の方は右記アドレスへお申込みを e-mail:kinoshita@iseji.net

新年明けましておめでとうございます。新しい年が皆様にとって素晴らしい年となりますようお祈り申し上げます。「暮らしにアートを」と、皆様とアートの素敵な出会いのお手伝いをさせていただきながら、新九郎は17年目を迎えることができました。

今年も、楽しい展覧会が多数予定されています。皆様に喜んでいただける「新九郎通信」を目指します。本年もどうぞよろしくお願いたします。

## 新九郎 1月の展覧会のご案内

## 近隣・友の会会員の展覧会情報

会期 展覧会名	見どころ
1/16(水)~1/21(月) あそべるネコ展	見て 笑って たのしむ こたつ等を置きネコが好きそ うな空間に 水彩・写真・陶 芸・彫刻・木工・フェルト
1/23(水)~28(月) 一幻想への誘いー 高木なえ展	小田原女流展で活躍する作家 幻想的な作風は、見るものを抒情 の世界へ誘います
1/25(金) 新九郎デッサン会	18:15-20:45 コスチューム、固定ポーズ 会費 1500円
1/30(水)~2/4(月) 第18回小田原市役所写 真愛好会写真展	国内外の風景、人物、鉄道、 スナップ等、 会員8名、約40点

会期・展覧会名	会場
1/4(金)~6(日) 神奈川子どもの詩展覧会	アオキ画廊 2F 0465-22-0825
1/6(水)~11(月)糸澤ユウ子着 物リメイクとビーズアクリル作品展	アオキ画廊 1F 0465-22-0825
1/17(木)~21(月) 西相美術新春展	アオキ画廊 1・2F 0465-22-0825
1/10(木)~14(月) 西ゆり会美術展	ツノダ画廊 0465-22-4250
1/6(日)~20(日) PAGE 展	すどう美術館 0465-36-0740
1/26(土)~2/16(土) すどう美術館コレクション展	すどう美術館 0465-36-0740
1/9(水)~2/4(月) 新春 富岳展	お堀端画廊 0465-23-7819
1/4(水)~9(日) 福幸から復興へ	ギャラリーゼン 0463-83-4031
1/11(水)~16(月) ART NOW	ギャラリーゼン 0463-83-4031
1/25(水)~30(月) 新春3人展	ギャラリーゼン 0463-83-4031

10回にわたり連載しました「小田原の街なみ再発見！」今回が最終回となります。ご愛読ありがとうございました。加藤様ありがとうございました。

### 小田原の街なみ再発見！ 板橋・旧東海道の街なみ 5

暮らし・営みが偲ばれる懐かしい街なみを訪ね歩くシリーズ 加藤恭夫



小田原用水の流れを追って板橋の街なみを後にした。板橋見付の所から国道1号線に出る。「このマンホールに用水と書いてあるでしょう。」言われなければ気がつかない。こんなところにも街なみの

歴史は顔を出している。しばらく小田原駅方面へ進む。しゃれた建物に心引かれた。レストランだろうか。配色がいい。魅力的な街角に出会う。楽しいひとときだ。

新しい建物のその下に、表には見えないが今も昔の用水が流れている。見ると、国道は小田原城に向かってゆるやかに下っている。さらに、建物のところから海へと通じる道も下り坂。一番高い所を国道(東海道)が通っている。なるほど、小田原用水はこの地形を生かして流れているのか。

人のつながりとくらしのつみ重ね。ふとそんなことを思った。



## お正月の美術館展覧会情報

- 東京国立博物館  
140周年特別展「飛騨の円空-千光寺とその周辺の足跡-」  
1/12(土)~4/7(日) 月休館、1/14.2/11 開館翌日休館
- 三菱一号館美術館  
シャルダン展 静寂の巨匠  
1/2(水)~1/6(日)
- 平塚市美術館  
新春の所蔵品展 近世近代の書画-湘南の文人墨客-  
1/4(金)~2/11(月・祝) 1/7.1/15.1/21.1/28.2/4 休館
- ポーラ美術館  
コレクター鈴木常司「美へのまなざし」  
第II期モノとポーラ美術館の絵画  
1/1(火・祝)~2/26(火) 無休
- MOA美術館  
新春展 廣重 東海道五十三次  
1/1(火・祝)~1/3(木) 1/11(金)~1/30(水)  
1/4~1/10.1/17.1/24 休館
- 世田谷美術館  
生誕100年 松本竣介展  
1/4(金)~1/14(月・祝) 1/7 休館
- 根津美術館  
コレクション展  
新春の国宝那智瀧図 仏教説話画の名品とともに  
1/9(水)~2/11(月・祝) 1/15.1/21.1/28.2/4 休館

「手作りのクリスマスプレゼントを今40軒に配ってきたところなんです」と、にこやかにお迎えくださった高木なえさん。地域の民生委員として、また5つの絵画教室の指導者として活躍中の作家である。年末のお忙しい中ご自宅をお訪ねし、1月の新九郎企画展「幻想への誘い」のお話を伺った。



スリムで小さな体のどこにこんなエネルギーを秘めているのだろう。お話を伺いながらその柔らかな物腰に秘められた、強く深いそして自由な人となりに魅了されていた。

生まれは小田原の浜町。運送業を営む裕福なご家庭で何不自由なく育ったお嬢様である。骨董好きな父親の影響を受け、今も「和・日本美」を愛しているという生活スタイルは、手入れのされた庭木や石を配したモダンな庭、美しいもの、本物に囲まれた生活の中からも伝わってきた。

幼いころから個性のはっきりした早熟な子供だった。近所のお寺が大好きな遊び場で、一人でお墓参りに行っていたという。小学生になると一人でよく夜の海に行った。線香を立て犬と一緒に寄せては返す海を飽きずに眺めていたという幼少の体験は、今の幻想的な作品の下敷きになっていることを想起させられた。絵のうまさも自他ともに認める存在であったが、どんなに誘われても美術部には属さなかったという。自由の心地よさと自分自身がよくわかっていたからに違いない。

美大受験は信頼するお父様の反対もあり、文化服装学院でデザインを学んだ。NHKの朝ドラ『カーネーション』に出てきた「コシノジュンコ」と共に学び、学生時代には、『帝人大賞』の受賞歴も

持つ。高木さんが学生時代デザインした赤いタイトなミニワンピースが、ドラマに出てきたときは驚いたと、朝ドラを懐かしくご覧になったという。1年だけ勤めの経験をした後は花嫁修業に専念。池坊の免許皆伝も持つお嬢様として結婚、2児の母となった今は南足柄で暮らしている。

しかし、環境には恵まれていた。近所には柏木房太郎氏がいて子供のようにかわいがられたという。20代で西相展に初出品したお嬢様の水彩画を見て、兎月人さんを紹介された。2時間で書き上げたアグリッパの石膏デッサンを見て弟子入りを認められ、兎月人さんの元で学ぶ。アトリエにかかる人物画は、どれも情感豊かな作品だった。2か月モデルを置きじっくり向き合ったという作品は、見れば見るほど抒情が溢れ見飽きない存在感があった。



高木さんの経歴は多岐にわたる。昭和62年には交通安全の県警ポスターで最優秀賞を受賞、交通統計ハンドブックに掲載されている。猛スピードのバイクに悪魔の爪が背後から追いかぶさるという簡潔なデザイン力には目を奪われた。毎年正月に行われている報徳会館の『絵馬展』には10年以上出品を続け、チャリティーにも協力している。意外な活動に朝日新聞の写真の選考がある。5年にわたり選定委員丸山好雄さんのサポートをされていたのだという。B4何千枚という応募写真の良しあしを、瞬時に判断するスピードと眼力の試される仕事は緊張感のある楽しい仕事だったと振り返る。好きな作家にカラバッジとヴァン・ダイク、エドゥアルド・ナランホを挙げられた。阿部公房 渋沢龍彦 谷岡ヤスジ ダリ・・・強い感受性を備えた高木さんならではの、徹底して観ることにこだわる

原点を垣間見た気がした。公募展では西相展、一陽会で10年間発表を続け、現在は南美会員として南美展・女流展を発表の場としてご活躍中である。

作品のモチーフも変化してきた。玄関に飾られていた「樹木」は具象でいてねいにその存在を追究しているものだった。兎月人氏の下では得意な人物画に磨きがかかった。そして、現在の幻想的な雰囲気の中からうごめくような何かを発している作品を、自分の中の「心の叫び」を表しているのだといわれた。

具象から離れた作品を描くようになったのは10年ほど前になるという。物が何を言おうとしているのか、大事な人の心の中が見えて感じてしまうという感性の強い高木さんにとって、今の表現にたどり着いたのは必然だったに違いない。何百年間も生きてきた『樹』はどんな時代を生きてきたのか、木の心を描きたいと思うようになったという。そんな作品の制作中には、いつもその配色までが夢に表れ指示される経験も多く、描かされている実感をお持ちだ。お子様も自立され、現在は広い家に愛犬と暮らしている。絵を描くのは昼間。色彩明度が変わる夜はもっぱら好きな音楽を聴きながら読書や詩を書いたり作品の構図を考える時間にあてているという。静かな暮らしぶりだ。ご主人との突然のお別れというつらい体験も肯定的に受け止め乗り越えられたのは、芸術に助けられたから。絵筆をもってよかったと、日々感謝していると語る。

「人の上に立つタイプの画家ではないが人にやさしさを与えることのできる画家にならなれる」愛する父親からの言葉を胸に、現在、箱根町、南足柄、小田原の絵画教室で指導に当たっている。お父様の「みんなを助ける絵描きになれ」という高木さんの今回のテーマは「幻想への誘い（いざない）」。心の自画像を表現し続ける高木ワールドは、新年1月23日より新九郎で出会うことができる。（新九郎友の会 木下和子）

十一月のこと  
古澤さんがとうとう逝ってしまった。亡くなられたことは9月号で書かせてもらったのだが、追悼展が終わり、お買い上げいただいた絵を納品し、諸々の雑務をすませたところで急に古澤さんがいなくなったことが実感として感じられてきた。

見れば見るほどいい絵だ。今「板橋風景」という内野醬油店を描いた絵を見ている。薄汚れた蔵の壁が何とも風情があり、絵描きにはよく描かれるモチーフである。古澤さんはただ内野醬油の建物だけを描いているのではない。蔵の前には日傘を差し、犬を散歩させている夫人が立ち止まっている。華々しい明るさはない。色彩はどちらかといえば地味だ。しかし暗いというのではない。見るほどに心に染み入る絵だ。グレーを基調に淡いブルー、グリーン、ピンク、赤が配され実に美しい。内野醬油店があり、犬を散歩させる人がいて、通りには電柱が立ち、電線があり空がある。板橋という町を描いているのだ。その町の空気までが感じられる。情感が細やかでこんな絵は誰にも描けない。それは古澤さんの人柄そのものである。

松永義夫先生は「絵に対する姿勢が素晴らしい」と言われた。豊島シズ枝先生は「師の絵に似てないのいいね。本当にうまい人は先生のように描かないのよ」と言ってくれました。戸樋谷哲生さんは「いい絵を残したね、本当に絵がわかってる人だったんだね。僕も古澤さんに負けないような絵を描かなければ、そう言われたような気がしました。」と話された。石井佐一先生も、古澤さんの絵を評価されていた。茂登山東一郎先生は2000年市展市長賞の「市の朝」をご覧になり「構図が素晴らしく、説明的ではなくよく描けている。」と言ってくれました。まさに泰西名画の趣があり、小田原に美術史というものがあるならば、必ずや位置づけられる絵ではないかと思う。

追悼展では、幸い何人かの方に作品を持っていただけのことになり安心した。しかし、大きい絵は個人の家庭では飾りきれない。何とか公共的な場に残せたいものだろうか。今回の展覧会を機に、検討していただける施設がいくつかあり、望みを託したい。

小田原には井上三綱先生をはじめとして、湯川治郎氏、柏木房太郎氏、門松茂夫氏、赤岩賢三氏、兎月人氏、児玉彦三氏、石井佐一氏、杉山夢人氏等西湘地域の美術に貢献し、優れた作品を残された多くの作家がいるが、作品はまとまって収集されていない。古澤さんのように同時代の画家が亡くなり、作品の行く末が現実として心配になると、急がなければならない。㊦